韃靼勝敗記

一

へ遠13

門へ遠13
特1423
巻1-5

海外路巷說

韃靼勝敗記

墨堤舍梓

詩ハ声ノ発スル所ニシテ画ハ象
ヒ形ノ設ケ文ハ世教ノ
興ル所ニシテ詩ハ情ヲ
述ベ文ハ事ヲ
ノ八主ニシテ画ハ
ノ八主ニシテ教ヲ

遠代綿々家を承て
祝賀の言葉を述べ
其ものも深く久しく
民人枕を高くして賑ひ
千代万代栄えまさんを

之を貴の古事記の御歌
にあり 豊葦原治世の所以
思ひ合せ身を修め
名を職を惟みまんこと
を願ひ奉る

支那韃靼喀嚕喀王

法王嗟嚩喇嘛
大元師麻辣拔児

大清謀臣 繞州巡撫趙元宗
大清猛將 艾丹城主孟伸良

大清智勇將 黒龍城主司馬翼
同夫人幹氏

韃靼英雄烏斯坦ぐらえのえゆうをさん
喇嘛勇臣火單らまのゆうしんかうたん
火單嫡子單毅得かたんちやくしたんきとく

喇嘛奸臣墨児蘭らまのかんしんめるらん
四ノ四

韃靼勝敗記惣目録

巻之一

一 韃靼地名の事
一 喀爾喀城中評定の事
一 韃靼勢黒龍城を攻る事
一 司馬翼智計韃靼勢を川中に溺る事

巻之二

一 喀爾喀王麻辣拔児を招く事
一 麻辣拔児喀爾喀王の陣に来る事
一 黒龍城落城の事
一 黒龍の城中酒宴の事

一 艾丹城攻め京勢後詰の事
一 羅金徒韃の陣を夜討ち敗軍の事

巻之三

一 艾丹城落城の事
一 孟仲良血戦討死の事
一 北京英吉利へ加勢を乞ふ事
一 趙元宗南京を攻る事
一 趙元宗南京勢を破る事
一 英吉利勢黄河に水雷の事
一 李伯玉英国の軍艦を奪ふ事

巻之四

李氏僅に接けく山西勢を悩ます
後明勢奇計をもつて清の大軍を悩ます事
英右利勢再び敗軍の事
右孝丈金復讐の事
墨兒蘭大草を欺討の事

巻之五

草毅得欲討并ふ寧古塔落城の事
鳳凰山の禁まて縫清討滅の事
大清の陣中に草毅得仇討の事
縫翅喩爾喩主後明ふ一味合体の事

目録終

太清道光三十年十月廿八日 穆彰阿 耆英 二臣論

仕賢去邪人君之首務也去邪不斷則任賢不専方今天下因循墮廢可謂極矣蓋治月壞人心日澆是朕之過然獻可替否匡朕不逮則二大臣之職也穆彰阿身任大學士受累朝知遇之恩不思共難共慎同心乃保位貪榮妨賢病國小忠小信陰柔以售其奸偽學偽才揣摩以逢主意從前夷務之興穆彰阿傾排異己殊堪痛恨如達洪阿姚瑩之盡忠有礙於

已必欲隱之者英之無恥喪良同惡相濟盡力合心
似此固寵竊權者不可枝舉我
皇考大公至正惟全以誠心待人穆彰阿何以肆行
無忌若使
聖朝早燭其奸則必立置重典斷不姑容穆彰阿特
恩益縱始終不悛自本年正月朕親政之初遇事摸
稜鍼口不言迨數月後則衝施其伎倆如暎英船至
天津初猶欲引者英為腹心以遂其謀欲使天下群

黎蠶食荼毒其心陰險寔不可圖潘世恩等保林則
徐則屢言林則徐柔弱病軀不堪錄用及朕流林則
徐馳赴粵西剿辦土匪穆彰阿又屢言林則徐未知
能去否偽言熒惑使朕不知外事其罪寔在于此至
若者英自外生成畏葸无能殊堪託異前在廣東時
惟抑民以奉夷人罔顧国家如進城之說非明驗乎
上乖天道下逆人情幾致變生不測賴我
皇考燭悉其偽速令來京然不即于罪尓亦必有待

也今年耆英名對時數言唉夷如何可畏如何應変
周旋欺朕不知其奸欲常保禄位是以喪盡天良愈
辨愈彰直同狂吠尤不足惜穆彰阿暗而難知耆英
顕而易著然而貽害國家厥咎維均若不立申國法
何以肅紀綱而正人心又何以使朕不負
皇考付託之重歟弟念穆彰阿三朝舊臣若一旦置
之重治朕心寔有不忍着從寛革職永不禄用耆英
雖无能已極然究屬迫于時勢亦着從寛降爲五品

頂戴以六部員外郎候補至伊二人以私欺上廼天
下所共見者朕不爲已甚姑不深問弁理此事朕熟
深覈計之久矣不得已之苦衷尓諸臣其共諒之嗣
後京外大小文武各官務當激發天良公忠位國俾
平素因循取巧之積習一旦悚然即悔毋畏難毋苟
安凡有益于國計民生之大端者直陳勿隱毋得仍
顧師生之誼援引之恩守正不阿靖共尓位朕寔有
厚望焉布告中外咸使知朕之意特諭

右ノ如ク北京ノ新帝即位ノ肇メ奸臣ヲ論シ
叙爵ヲ換ヘ國政ニ震襟ヲ碎キ玉ヘド一治一
乱ハ天ノ定數ニシテ何ゾ人力ノ及ブ處ニア
ラズ聰明英主ト虽ドモ是ヲ免ガレザルハ古
今相同ジ咸豐翁ノ賢ナルハ此勅書ヲ以テ推
テ知ベシ

墨堤舍敬白

韃靼勝敗記巻之一

○韃靼地名の事

抑大韃靼と云ハ中北亜細亜の総名にて皇邦内数十
ほふ名皇國に属するあり支那に属する魯西
亜に属するあり又独立韃靼と称して支那及び魯西亜
に属せざるの國七ツあり皇邦内まで数ほふ名にて名く國王
あり魯西亜韃靼独立韃靼を先づ支那に属する韃
靼を数へ挙るふ皇國五ツ朝鮮 滿州。蒙古。喀爾喀。薩哈
連一名哈剌土 又山丹 なり是を指て支那韃靼と云人皆強健み
てる上に武檢を使ふ皇國王を号称して大汗と云その中に

満州の東部熊沢より界し山ハ雅克薩城より延り郭中に二の
大府あり曰一遼東と云第二吉林第三と称杜支加爾と云
古清国祖先新覺羅氏なり満州の寧古塔より降延あり太
祖一統し初め僅に百五十人にて風凰山ふ岩を拳て後に中花
成祖一統し都を山海に建てより久しく太平打続き小今
咸豊帝の時に至り清の王威衰へ上に奸の擯る所官吏
を義と称し仁政と称して虚政を施行し天の志ろ
志むる所や廣西海賊朱元璋芝朝恢復の
志を発し義兵を募る浩武龍李伯玉張
弘範と先として数十万の軍兵あつまり並ちに玉くと

抑も南京府を攻元山西を新都と一年号を天統と
風俗衣服も先朝に復し仁政を施し武威を輝く国
に赫きその法を慕つて旗下に馳集る者毎日あるよいと
あるぞ見ふ徒く内地十八省の民くの法候より北京へ告
るの檄の書を挽よりも行繁し帝を始め欽差法大官大
に驚き軍議評定区区なる而へ満州第一の都府遼東王が
吊打列来して雑組の内喀爾喀王及達を全く黒
龍城を攻るのを称へり

○雑組撃 黒龍城を攻るの

喀爾喀王 元数代古清に属し連編[illegible]ふを来た

清の苛政ふは国窮せり上は中華ふ強孔ありて深級
繁くれど国信く国窮し老を養ひ幼を慈しむる術なく
壮者ハ家業を棄て他ふ走り老弱ハ餓死するふ至る
ふ終に嗜嗜王ふ大ふ嗟嘆し咸豊二年辛酉の
冬我徒役の士を集めくわ従して曰我ふハ累代古清乃
諸ひふ属なと雖とも今清の苛政ふは国窮し既ふ十氏
餓死を免れざるに至る君君ふハ古賢の戒ふ
て武王紂を討ぐ反逆の名臣紀を滅ふ者を一夫とふ
一夫紂を征すと都く英名を後世ふ残さを我家元より志
清ハ三代相恩の主人ふあらず時世よりて捨ヤふ候する

のみ徒ふ悪名を蒙らんよりハ宜しくこの
ひ武を助け強敵の清を討く威を海内ふも表ざさんを
欲すとあるれハ一度の法令一発ふも及ぶべ今君の命する
ところ誠ふ元より那ふ思ふ立させあるを待ての分
命を抛ち内を整ひ後世と忠義の名を残さんと志る
者の面目なりと欽義表ふ感じまてさくそれハ嗜嗜王
ふ大ふ驚び汝等ふ征伐せり此上ハ一日も早
く兵を興さんと率義一致し而又諸侍と謀して軍議を
為すに馬兒罕を先ヤ内ハ支那難鞑中の清ふ属
する者皆我国のごく清を怨むること骨髄せり志ふ

支那韃靼
喀爾喀城中
大評定の圖

能城い小秋湯禦寿一の要地なるべば北条儀代の支配又馬襲
うくと城代として居るさ又浦あの内寧古信い古清の高
紀帝降誕の地ふして教代小条帝の連枝を重く尚時老
親王ゆうん も同じく小方の参机地変と結義も同じく遠
東い要害寿一の地うして皇族ふまふ居り同しく古
林見ふ次ぐ儀代の臣見ふ居り今此を挙ること吟い
ふ北京へ海へ対ふと考同んとるせり能あるべ海州へ攻
入姫路寧古信より古林遼東を元し徒で小条を襲い中
華急く平均せんとれ速まべ百児西へるるる出く馬児
軍まるふ向いやるい共々の高編玉拾せり去ちうう今も

やうく通り黒能城南附の城代司馬襲しくい小条方勇
士二の人ちり我軍勢先ふ浦あと対んとして黒能城より
後信せべ味方雑義ちうんとれ速る常備喰王 見と度
て紙海皆移りさべ先ふ黒能城を攻るべし去ちうう山地
幸囲うて雪深く今急ふ軍を出ちの成雑ちれば暫く喰
れのれと移く軍を出ちべしと俳定一変して出陣の用
意とるるるる先法矢ちうもやく咸豊二年四月上旬
激文を作く雑翅列国の諸侯へ黒能紙付の旨を解うり
して法皇嗜味喇嘛門流の結盟を率く一番手能
加り見と吟て列国の法度収でるる見て意で既ふく

喰囂喰王うるうも軍勢又万騎ばかりにて加賀川原を押出されば一味合体の諸軍我劣らじと張張り軍威日くに盛に鋭をつくして多くの軍勢と倩く倒山破海の勢ひにて黒龍城をとさして押寄んとすれば此度の城ふ吟へられば城代司馬翼しばく〻を呼び吟ゆる大勇剛のねろうまびかしく〻も強くるとかえれども先は北面へ廻るとん海へ至るまちふ汐潮の用をとなりて日と経く難組勢黒龍城へと押寄る司馬翼しばく〻半途ふ勢とかけ出して至へ鋭ふ既ふ支勢れを分と為くく鉄炮と打掛炮煙の未ぐ納らざるふ乗じふ長槍をうちふり数十合みして猪敗多くされども日已ふ暮ふ及んで双方勢と引揚る難組勢はいよ〻猛威を示もとも黒龍の城代司馬翼しく〻元来勇剛逞しく猛ふ軍勢もサるうるさきに城代しも懼るるきるく汐鋭を多くまびいつ果べきを及くざりうれば喰囂喰王うるを嗤嘲嘲ざらうまと笑して軍鋭と変め却勢二方ふ分まて一時ふ攻落さんと押寄るに城内も撓ませず二方共ふ中途ふ対く出て対して突鋭を中ふも大きふ向へし難組勢勇猛をもんで敵を攻くし切ふ城兵対し難くやみうん討死ま負ふうれば足元ふ迫る難組勢後ふ多く勢とをの大勢ふ知して城内ふ付入一

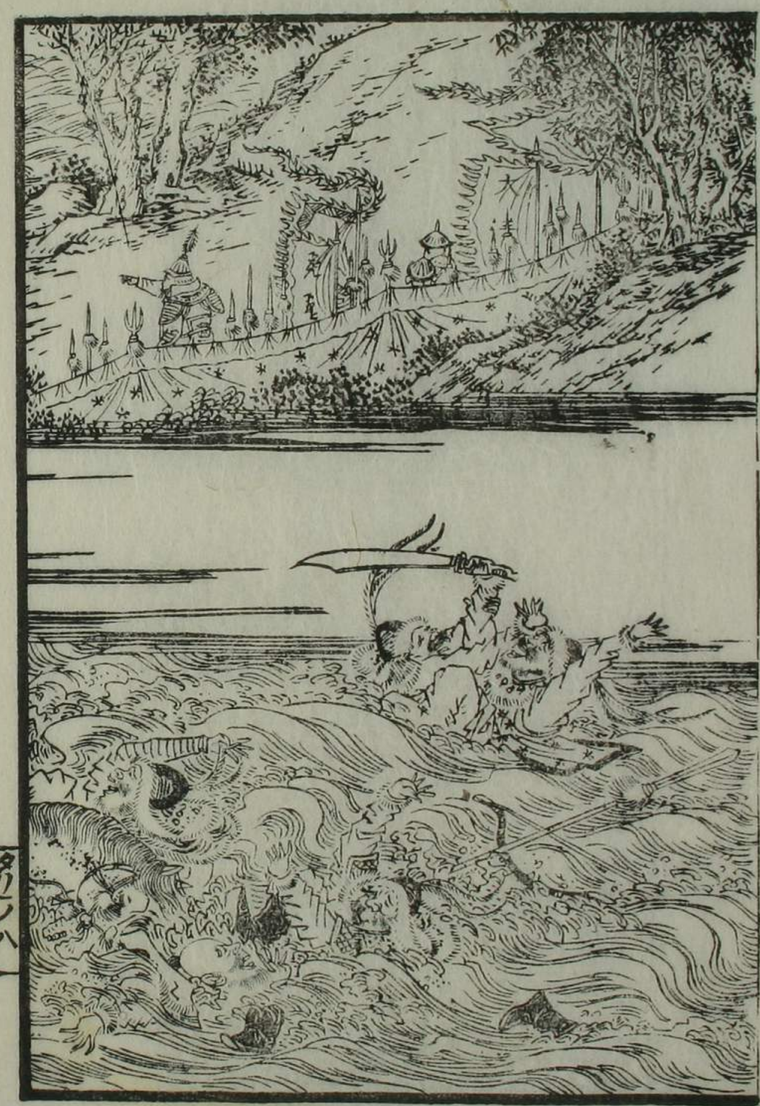
鳥ゝ鳴きと操配打振延をぐつて一ツの廣野ゝ駆出て
狂ひもをまんとする所ゝ敵方の劉岳菊剌新ゞらと名乗て出
て進し戦ふこの勢小勢なれども強く攻へを立直しく
義を全と戦へば雑兵勢も踏ぞく切をさしふ廣き
野ゝ出ぞくを見地も狭く元内より此時敵岳の後陣より
西澤流の天炮ゝ強薬を込で天地も裂るぞゝよ打出す甚
敵雲中ゝ鳴響き龍巻りて廣野の中ゝ落つと名しく
ひゝつの地雷火地中より憤発し火勢二三丁に飛布て
雑兵勢是ゝ焼き立ゝ焼き立ゝ中ゝ火焔の接ゝ中又
一ケ所の地雷火憤発を狙りと是ども死を顧りゝ雑兵

勢陣方を励し戦ふ又地雷火憤発都合十数ケ所の地
雷火に廣野てぐく火ゝ敵く火勢強く燃ゝ
猛く炎のへども士卒麋烟して戦ふて紙くぶ乱まを敗
走もたんども敵兵も火を潜で追ゝる紙くぶまべ口大筒を打
掛るのを勝間を狙り勢をまとめて敵ゝ陣を又敵の東北
より襲ゝる一ケの雑兵勢操ゝ操ぐ攻鋭まべ敵岳同じく
対戦し炮戦終りて楯竹束を打捨て長槍を交へ挑をたく
ゝの後陣切ゝ敵岳の出法し陣所の遠後ゝ九二
三十ケ所の大なる弓猛荒木を以く俄ゝ築立るものゝ
雑兵勢是を見て怪しを思へども是て軍勢を繰出しく

あるべし又鉄炮大筒の後へありとも又へざるる事ありとも陣
これが先者のあり様を見て勇を励し切伏突伏する輩く
血戰せしめば孫呉面り雖て一蔵に亟を難勢を添て
鶩直り亟蒐る打しも坤の風烈しく吹来る彼二三十の
言稽の上より胡椒あるひは蕃椒の粉を撒しく撒ちそ
雖勢は西南に向つくそむ而る風上より右の粉撒散れ
鼻と入口と入咽を刺へ目と開く事能はず恵勢眼と
冥て一寸先は闇と成孫呉亟を亟し突掛るそ
雖勢行を阻ぎつき右往左往に敗走する司馬翼
しが智勇兼備のわるべきく亟を往能勢を引揚る又孫

の西北より向へし雖勢も同じく先て半皮楯を以毎に
打せ鉄炮を打せぎ煙と共に後へ攻掛るに此の大将
司馬苞も勇く進つし孫呉と打掛合
り水に薄を亟けしに元来勇ふて智謀軍に精
なるそを知を以て敵の亟くを陸に亟迫り左の
往サ四方よりをしに寒河と云て幅七八里もあるんと見
き大河あり不思議なる水僅ふ雖を浸もそりなるを
孫呉河の中途に踏留まりて一寸も引じと亟し戰こけり
大河の西なき河原ちまべば見元ふ陸る和るく乎ひふを逆
負北と浸く亟つ亟しつふ変万化の戰ひを時と移そし

司馬翼の智計
難韃勢と川中に
溺死せし圖



時義兵起も烈しく賊子中に起りて兵と戈を一変の狼煙
内めさ揚りしも共何の怪しき事もあるざりしかば
こゝとあき川上嘯くと伯波天を衝だりに白波
立て落葉の勢い途と呉てよく此方の岸より巨く鞆
鞆勢い起もとんと寄る而へ乱る大水漲り来りスワ傷付に
落入らと周章めさめんともこゝも為矢とうも
ちやうまい鞆勢見ふ押流され溺死する者数と知
を故い百刎くして稀よ助るもあるいたを岸をくして
激さ逆らくもあまとも軍勢八九分を失ひしい皆可る裏
しばゞ智係より出て三軍共よ乱のごく敗わし鞆鞆ゑと

矢ふるも殺しうれんば再び攻る義勢攪しうば遠ふ
陣を張けて勢一つ柵と結い逆寄の要害とゐし
至三軍の勢を集めく評定もまどよ後あて所務の
利と充なる者ろく意と捲て歓勧可る裏しばゞ智係と
柿を一句も出ち者ろく座中ちうけく乃へるあよ馬
児軍うん輝を抽てゆ中ちうし下国抗慶山の麓に麻辣拔児
まらるとゑ一奥人ありて成長法古中華の長尚りよ所鞆
ぐてふ舟しく茅廬ふ敗と潜め今北京の苛政を悪こて
閑居し明君の出ると結我軍い意ことを対く窮民とたて
るの義兵ろまい梁と拔うば何ぞ蕃ん梁来らい大軍師

の捻と孝うーめい基珍協を勿論海翁と拔き北京と攻平
るるよ安うーんと速えれば咨嘱咨王るるれも嗟嘱嘱麻だらんらま
も大よ拔べよを拍さく寿なり妙るり弗くそ麻錬拔咒なる
と侯ーめんと馬兒罕えふ幣拍と打仕亜ちよ抗慶山の麓
へ証うーむ

難韃勝殷詑巻之一終